

ツケ払いにみる信用と結束の創出 —長野県松本市 (株)しづかを事例に—

市東真一（神奈川大学日本常民文化研究所、(株)しづか）

本発表では、報告者の実家である長野県松本市の飲食店の(株)しづかで行われているツケ払いを事例に、現代に行われている飲食店経営者と顧客の交流について報告を行なう。そこから、金銭を媒介した店側と客側との関係性の創出について論じていく。

(株)しづかは、創業75年の長野県松本市大手4-10-8にある客収容能力250名の比較的大型の民芸風の居酒屋である。報告者が実家の手伝いをしている際、ある会社の接待で「すみません、ツケでお願いします」と注文を受けた。現在、(株)しづかでは、電子決済やクレジットカードでの決済が可能である。その中で、なぜツケ払いで支払いをお願いされたのかと報告者は疑問に感じた。そのことに関して、女将である母に確認したところ、「あれは接待で、取引先にツケ払いを見せて信頼をアピールしているの」という話を聞いた。それを受けて、報告者はツケ払いが単純に金銭を後日支払う行為ではなく、信頼を表出させる手段として活用されていることを知る。そこで、実家である(株)しづかのツケ払いに注目して、店側と客側の関係について分析を行う。

これまで、民俗学では生業の延長線上のもとで経済的要素の研究が行われてきた。その後、2010年代から地方都市の商店などを事例に、金銭を媒介とした経済に関する研究が行われるようになる。塚原伸治は柳川の商店を事例に、ツケ払いについて長期的な信頼関係の上で成り立つ「伝統的」な顧客関係の一種であると指摘している〔塚原 2014〕。いずれも、これらの研究に関しては老舗の経営方法として把握がなされていた。また、一方で報告者が事例とする(株)しづかでは、食品の提供だけではなく店側が無尽講などを主催するなど、店側がコミュニティの形成を促すなどの相互関係が存在している。そのため、商家の研究においては店側だけではなく客側との関係性について注目する必要があると考えられる。

本発表では、実際に発表者が遭遇したツケ払いの事例とともに、店側の対応と客側の意識、それらの関係性などについて検討する。そこから、現代の飲食店においてツケ払いがどのように活用されているのかについて考察する。その他に、(株)しづかで開催される無尽講である店無尽についての報告も行う。

参考文献

塚原伸治 2014 『老舗の伝統と〈近代〉 家業経営のエスノグラフィー』 吉川弘文館